

『中辺分別論』における本来性 (prākritiva) と偶然性 (āgantukatva) に ついて

HOORNAERT PAUL

『中辺分別論』は、空性には三のあり方、(1) 本来清浄である状態 (prākritivisuddha) (2) 外来的に (āgantuka) 汚れを伴う状態 (samāla) (3) 外来的に汚れを離れた状態 (nirmāla) が存在するという。この論の体系の理解を深めるために、どうしてこの三のあり方がなければならぬかという問題を論じたい。結論を先取して述べると、それら三によって道における実践 (mārgasatya) が意味づけられ、実践による解脱証得 (mūdhāsātya) の可能性が根拠づけられるのである。

(1) 空性或いは円成実性とは、依他起的に存在する法が常に遍計されるあり方を離れて完成している (parinispanna) 状態である。というのは、依他起的に存在する法が専ら依他起的に存在し、遍計されたように存在しない状態そのものは依他起的ではない。かかる状態が因縁によって生起することなく、既に常に完成している法の本来 (prākriti) の姿である。

(2) もし如上のように空性が一切法の既に常に完成しているあり方であるのならば、どうして我々は、それを自然に証得せず、何の

精進もしないで解脱していかないのか。それは空性中になお虚妄分別 (abhitaparikalpa) が存在するからである。というのは、煩惱障と所知障としての虚妄分別が存続する限り、空性はそれによって覆われ、顕現しない。換言すれば、一障の種子が完全に断滅されない限り、即ち転依 (śārayaparāvṛiti) が完成しない限り、空性は垢れを伴う (samāla)。この有垢という段階が必ず承認されねばならない。なぜならば、もし空性が染汚されないとすれば、あらゆる衆生は精進することなく解脱していることになるであろう。その場合、正に実践は無意味である。

(3) 次に、虚妄分別が完全に消滅した時に、空性は清浄化され (nirmāla)、間断なく顕現する。これが、真如が一切垢を完全に離れた解脱或いは涅槃位である。空性が道によって実際に清浄にされることもまた不可欠である。そうでなければ、修行は無益である。要するに、道諦と滅諦が成立するためには、空性中に有垢無垢の兩位が認められなければならない。

(4) さて、もし空性が先に有垢であり、後に無垢になるとすれば空性はいかにして変異することなく、常にかくの如く (tathatā) であると断言できるのであろうか。この問題解決への手がかりは外來性 (āgantukatva) と本来性 (prākritiva) の区別にある。

(a) 先ず、虚妄分別は法本来のすがたではなく、外来的 (āgantiva)、暫定的すがたであるにすぎない。それ故、虚妄分別による汚れは空性にとつて外来的であるにすぎないし、またそうでなければならぬ。というのは、もし汚れが偶来ではなく、法本来のあり方であれば、解脱への努力は無益であろう。何となれば、法本来のあり方が滅することは決してありえないから。

(b) 次に、本性として常に清浄である法は、本来的に染汚されないのならば、本来的に清浄になされえない。従つて、外来的であるのは、有垢位だけではなく、道によつて得られる無垢位もまた偶來である。第八不動地に住する菩薩は無生法忍(anupatikadharmasamī)を得て通達する。染汚の法が生じても法界の清浄が減ずることはなく、清浄の法が生じても法界の清浄は増長しない。なぜならば、先に存在しない法(同義語を用いれば、外来的な法)は一として生じないから(apūrva-dharma-anutpada)。常に先に存在するのは法の本来清浄だけである。染汚された法、そしてその対治策としての清浄な法は先に(即ち、本来的に)存在せず、つまりとこそ生じはしない。

(c) 有垢無垢両位が共に外来的であれば、有垢から無垢への変化、即ち転依(āstrayaparivṛti)もまた外来的であるところをわづらを得ない。ここでもう転依とは āstraya としての空性が有垢位から無垢位へ転換することである。しかし、空性は常に本来清浄であるから、この転換によつて初めて清浄となるのではない。無垢位への転換とは、空性における本質上の転換ではなく、法の本来的あり方としての空性が覆われないで、顕現していくことであるはずでない。従つて、もし法が空性において本来清浄でなければ、有垢位から無垢位への転依が成立するはずはない。換言すれば、法が空性において常に転依しているからこそ、有垢位から無垢位への転依、即ち解脱は可能である。この意味におつて『法法分別論』は、「転依は常住(trag-pa)である」と説くのである。有垢位から無垢位への転依は、転依そのものが本来的に完成していることを証得する(cadhigam)ことに外ならない。この証得が深まれば深まるほど

虚妄分別の障害は消滅し、空性が清浄になされ、より完全に顕現していくのである。

(5) 結論。本래性と外래性の考察を通して道諦と滅諦の成立に要請される三のあり方を知りえた。(1)一切法は空性において本来的に完成しており、清浄である。(2)本来清浄は、染汚とは別に存するのではなく、それによつて覆われたり、外来的に染汚されたりする。(3)外래の染汚が実践によつて消滅して本来清浄が顕現する。

染汚は外래的であり、清浄は本来的であるから、衆生が解脱への希求を懐くのは無理からぬことである。しかし、希求するだけではなく、精進もまた必要である。染汚は、外래的であろうとも、実践によつて消滅させられるべきである。そして、染汚が外래的であるからこそ、実践にはそれを消滅させる効用が存するのである。

1 samala-nirmala, prakṛti-āgantuka ㄷㄹㄱㄴ Madhyantavibhāgakarika (MVK) I. 16, I. 21-22, II. 15a-15c, V. 20-22 及 ㄴㄷㄹㄱㄴㄷㄹㄱㄴ Madhyantavibhāgabhāṣya (MVB, G. M. Nagao ed.) ㄵ Madhyantavibhāgafika (MVT, S. Yamaguchi ed.) ㄶㄷㄹㄱㄴ MVB 18, 2-3; MVT 11, 2-3; 22, 16; Trimsīkākārika 21 cd; Trimsīkabhāṣya 40, 4-5 等々參照。ㄷ MVT 11, 3-9; 12, 4-7; 12, 21-25。ㄹ MVT 51, 20-23。ㄱ MVB 26, 21-27, 2; MVT 59, 15-60, 2 ad MVK I. 21 ab。ㄴ ekantanī-mulatathā (MVT 125, 19)。ㄷ MVB 27, 2-3; MVT 60, 2-11 ad MVK I. 21 cd。ㄹ MVB 24, 10-11; MVT 52, 2 ff。ㄱ dvayam apy etad āgantukam aviśuddhir viśuddhiśca paścād iti (MVB 67, 20-21 ad MVK V. 21)。ㄷ MVB 35, 22-36, 1; MVT 105, 6-16 ad MVK II. 15 c。ㄹ Dharmadharmatā-vibhāṅgavṛti, Tib. Ed. by J. Nozawa (Hōzōkan, 1955), p. 45, 4-5。ㄱ MVT 242, 20。

(東北大学大蔵院)